

Title	湿地保全活動（蕪栗沼と片野鴨池）にみる対立から協調への移行プロセスの研究
Author(s)	菅沼， 祐一； 梅本， 勝博
Citation	日本地域政策研究， 7： 73-80
Issue Date	2009-03
Type	Journal Article
Text version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10119/8164">http://hdl.handle.net/10119/8164</a>
Rights	Copyright (C) 2009 日本地域政策学会. 菅沼祐一， 梅本勝博， 日本地域政策研究， 7， 2009， 73-80.
Description	

# 湿地保全活動(蕪栗沼と片野鴨池)にみる対立から協調への移行プロセスの研究

## From Confrontation to Collaboration: Case Studies of Environmental Conservation Movements at Kabukuri-numa and Katano-kamoike

菅沼祐一 (野村総合研究所)

Yuuichi Suganuma (Nomura Research Institute)

梅本勝博 (北陸先端科学技術大学院大学)

Katsuhiko Umemoto (Japan Advanced Institute of Science and Technology)

There are 2 wetland conservation movements, Kabukuri-numa and Katano-kamoike in Japan. Both areas are registered on the Ramsar List of Wetlands of International Importance. These are cases that changing processes from confrontation to collaboration can be observed.

In this study, when searching for details, the following 7 steps are found as a transition process. (i) Making an alternative vision by an advocate on the environmental protection side. (ii) Arranging the meeting with an advocate and a collaborator. (iii) Proposing an alternative vision to a collaborator by an advocate. (iv) Getting an approval from a collaborator. (v) Meeting various local actors on the introduction of a collaborator. (vi) Listening attentively to various local actor's word. And (vii) Having a new local image by each actor.

### 1 研究の背景

環境保全の領域には、開発か保全かという二者択一的な意見がある。しかしながら、日本各地の都市的地域と自然的地域とが近接する場合など、完全なる保全を選択することが難しい場合は数多い。このような状況に対し、近年では持続可能な開発、賢明な利用(ワイズユース)、自然・生態系の順応的管理など新たな考え方が提示されてきている。このような考え方は、これまでの二項対立的となりがちな考え方からの転換を求めるものである。

開発か保全かといった二項対立的な考え方ではなく新たな別の考え方の実現という視点から各種の環境保全活動をみてみると、対立的状況であったものを協調の状況へと転換させ、そして新たな取り組みへと成長させている事例がある。その対立から協調へと転じていったプロセスを探ってみると、人と人との出会いがきっかけとなっている。このような出会いを生み出し、地域に新たな取り組みを創造して

いくことは、現在の地域づくり・まちづくりの基本的課題の1つと考えられる。

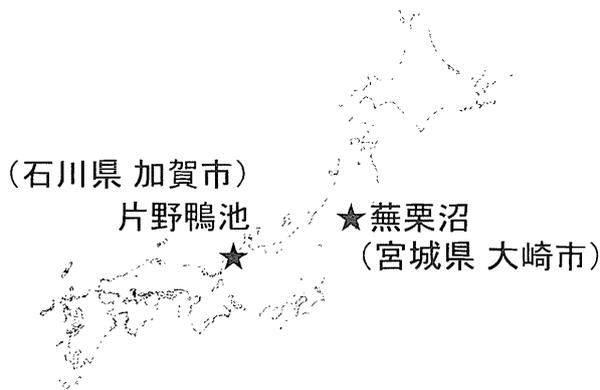
### 2 研究の目的と方法

本研究では、かつては関係主体が互いに対立的感情を有していたことが観察できる蕪栗沼(かぶくりぬま、宮城県大崎市)、片野鴨池(かたのかもいけ、石川県加賀市)、これら2地域(図-1)を事例研究の対象として、関係主体による行為を分析し、そこから対立から協調へと転じていった移行プロセス(以下「協調への移行プロセス」)を明らかにする。

分析にあたっては、蕪栗沼および片野鴨池で環境保全活動に取り組む関係主体(以下「アクター」)へのインタビュー調査<sup>(註1)</sup>を実施した。

蕪栗沼と片野鴨池は、いずれも「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」(ラムサール条約)に登録されている湿地(以下「ラムサール条約登録湿地」)である。

図-1 蕪栗沼と片野鴨池の位置



### 3 先行研究レビュー

分析対象とした2事例とも、かつては対立的状況にあったが、現在では協調の状況へと転じている事実は、先行研究により把握できる。しかしながら、協調へのきっかけとその背景については、先行研究では確認できない状況にある。なぜそのような協調が生まれたのかについては研究されていないところである。

#### (1) 蕪栗沼についての先行研究

蕪栗沼での取り組みについては、香川(2000)、出川(2005)らにより、これまでの歩みと全体像が明らかにされている。また、人と人との出会いがきっかけとなり新たな活動が始まったことも報告されている。2000年には、地元の新聞<sup>(註2)</sup>で水鳥保護活動に取り組む人と蕪栗沼周辺で農業を営む人との出会いが蕪栗沼での新たな活動のきっかけであったことが紹介されている。また、菊池・鷺谷(2007)は、関係主体へのインタビューをもとに、蕪栗沼周辺に住む人たちの日々の暮らしと蕪栗沼との関わりについての価値観の変化を報告している。

#### (2) 片野鴨池についての先行研究

これまでの歩みも含め片野鴨池での取り組みについては、敷田・森重ほか(2001)らによりその経過が報告されている。また安室(2003)は、江戸時代から続く伝統的なカモの狩猟法(「坂網猟」と呼ばれている。)の研究の立場から、それまでは互いに対立

的感情を有していた坂網猟の猟師と水鳥保護の立場の人とが協調へと転じていたことを報告している。菅(2006a,b)は、江戸時代から現在までの片野鴨池の歩みと全体像を明らかにするとともに、猟師の側からみた水鳥保護の立場の人に対する意識変化の観察結果を報告している。

また、片野鴨池でカモの狩猟についての対立的感情が存在していたことは、牧野(1986)、中村(1989)、小杉山(1990)、安室(2003)により確認できる。

#### (3) 協調へのプロセスについての先行研究

地域づくり・まちづくり分野では、協調を実現していくためのプロセスについて、いくつかのモデルが提起されている。梅本(2002)の知識創造自治体モデル、Suenaga(2004)の知識通訳者モデル、敷田(2005a,b)のオープン・サーキットモデルなどがある。また宮西(1986)は、合意形成には賛同-共感-納得-同意という段階性があることを指摘している。

これらモデルは協調が成立している状況全体を対象とするモデルであり、移行プロセスのみに焦点を絞った理論的な協調生成モデルはみられないところである。また、対立的な価値観を有していたアクター同士による互いの歩み寄りのプロセスに焦点を絞った理論的モデルもみられないところである。

### 4 2事例から観察されるアクターのモデル

2事例での協調への移行プロセス(後述)をみると、その移行に深く関わりのあった主体として3つのアクターからなるモデル(図-2)が観察できる。

3つのアクターのうち1つめは、環境保全の重要性を提起したアクター「唱道アクター」である。2つめは、当初は水鳥保護には反対であり対立的立場にあったが、唱道アクターとの出会いを通じてその理念に賛同し、その後は唱道アクターと一緒に活動を推進していくアクター「協働アクター」である。3つめは、地域の農家や住民であり、地域づくり・まちづくりの活動を地域に広めていくにあたっては



### ①伊豆沼での長年の取り組みから知見を蓄積

蕪栗沼での取り組みに大きな影響を与えたものに、唱道アクターによる伊豆沼での取り組みがある。伊豆沼は、蕪栗沼の北8kmほどの位置にあり、日本国内で2番目のラムサール条約登録湿地として知られている湖沼である。伊豆沼は、国の天然記念物への指定、宮城県の自然環境保全地域・国指定の鳥獣保護区特別保護地域の指定など法的な規制が講じられてきた地域である。唱道アクターは、長年、伊豆沼での環境保全活動に取り組んできていた。

唱道アクターは、伊豆沼での取り組みを通じて得てきた経験を参考に、蕪栗沼での環境保全活動に取り組んできたという。唱道アクターは、伊豆沼での取り組みを通じて、こうしてはいけない、こうしたらうまくいかないという失敗事例・経験を積んできたという。改めて蕪栗沼のケースを振り返った時、非常に順調にいったケースであったという。蕪栗沼の場合、蕪栗沼のみで考えるのではなく、伊豆沼での経験も含めて考えることが有効であったという。

### ②鳥がいることが農業にプラスとなるという考え方の必要性を認識

伊豆沼がラムサール条約登録湿地になったことは水鳥保護の面では大きな成果であったという。しかしながら、水鳥の立場から見ると、夜間はねぐらである伊豆沼にいるが、昼間は餌場である周辺の水田にいることとなる。雁などの水鳥は、餌場として水田を利用しており、間接的には地域の農業に依存している状況にあったという。

これまでの慣行型農業の枠組みの中では、水鳥の生息については考慮されていないし、鳥にとって利用しづらい環境にますますなっていく、このままの状況で行くと、いずれ鳥たちがいなくなってしまうことも十分予想できたという。そのような事態を招かないためにはどうしたらよいかと考えると、最終的には、「鳥がいることが農業に恩恵をもたらす具体的な姿を示さないといけない、そしてそれを考え、提案していかないといけない」と唱道アクターは考

えたという。「農業者を巻き込む新たな枠組みをつくらなければいけない」と考えたという。農業者が自分らの農業のことを考え・取り組み、その取り組みが結果として鳥にもよい環境を提供するような姿を示すことが大事であると考えたという。そのようなことが見えてきたという。

### ③環境に関心を持つ多くの人たちへの問題提起

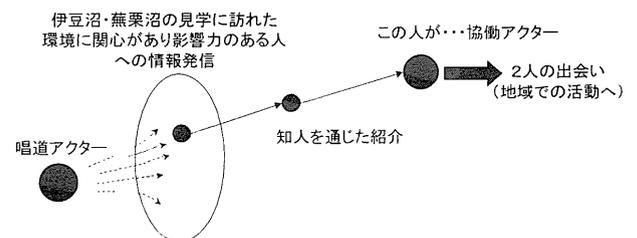
唱道アクターは、蕪栗沼の良さを多くの人に紹介するとともに、当時検討されていた蕪栗沼の全面掘削計画への危惧などを環境に関心を持つ多くの人たちに問題提起していったという。数多くの人への問題提起が功を奏し、蕪栗沼の全面掘削計画が取りやめとなる。この計画中止が契機となり、水鳥保護への流れへと大きく変わっていったという。

### ④地域のアクターとの出会いと協調への始まり

唱道アクターによる数多くの人たちへの問題提起を通じて、蕪栗沼周辺で農業を営むとともに農地の返還を求められていた白鳥地区の耕作農家の代表でもあったアクター（後に協働アクターとなる。）が共通の知人を通じて紹介される。

この協働アクターとの出会いがきっかけとなり、蕪栗沼での新たな取り組みの始まりとなった蕪栗沼探検隊の取り組みへとつながっていく。（図-4）

図-4 蕪栗沼での唱道アクターと協働アクターとの出会いの経路



### ⑤協働アクターによる地域の人たちの紹介

出会いの後、協働アクターは、唱道アクターに蕪栗沼の周辺に住む人たちを数多く紹介していったという。紹介していった人たちは、これまでの農業や地域での暮らしについて独自の思いを持った人たちであり、手強い人たちであったという。そのような

人たちとの対話を重ねていくことを通じて、互いの考えが同じ方向に向いていったという。振り返ると、このプロセスは、地域づくりに不可欠なプロセスであったという。地域に大きな動きを作り出して行くには、手強い相手をどう味方にできるかが重要であるという。手強い相手ほど力強い味方になったという。最初は、相手が考えていることを傾聴し、想いを全て引き出すことが効果的であり、お互い仲間であるという気持ちに通じるようになると、お互い変わってきたという。

#### ⑥地域の人たちによる新たな価値観の獲得

地域パートナーとなった地域の人たちへのインタビュー記録（菊池・鷺谷 2007 ほか）をみると、「従来はなかった誇り・価値・地域の宝を見いだす」「興味が湧く・興味が育つ」「未来のビジョンをゆるやかに共有する」といった言葉が観察される。地域の人たちは、自らが暮らす地域についての新たな価値観を獲得するに至っている。

以上までが、蕪栗沼における対立から協調への移行プロセスである。

#### （3）蕪栗沼での協調へのきっかけ

蕪栗沼の場合、唱道アクターと協働アクターとの出会いが協調移行への重要なきっかけであったことが観察できる。

最初に出会った当手を振り返り、唱道アクターは協働アクターとなった人に「雁は全国の中でここにしかないし、環境に敏感な鳥である。ここは、環境に敏感な雁が住めるほど豊かな環境である。それを利用してはどうか。農業に大きな恩恵をもたらすことができるのではないか。」と話したという。雁は、害鳥ではなく、ここにしかない鳥であり、地域の宝であることを話したという。このような唱道アクターからの投げかけに対し、地域で農業を営んでいた協働アクターとなった人は農業へのプラスの効果を感じ取ったのではないかと、唱道アクターは感じたという。

## 6 片野鴨池の事例分析

### （1）片野鴨池の概況

片野鴨池は、石川県南部の加賀市にある約 10ha のラムサール条約登録湿地である。冬期には、シベリアよりカモや雁などたくさんの水鳥が飛来し越冬する場所である。近年の片野鴨池では、環境教育の一環としての池周辺での水田耕作の復活に加えて、野鳥観察・観光・環境教育など、多様な目的で利用されている。

片野鴨池の本来の機能は、農業用水供給のための貯水池である。また、片野鴨池の周りでは古くから水田耕作がされてきていた。しかしながら、米価の抑制や、湿田であり水田耕作がしづらかったため、池周辺での水田耕作は徐々に行われなくなる。1999 年には、ついに池周辺でのすべての水田耕作がなくなるに至る。また、江戸時代より続く坂網猟も猟師の高齢化によりその狩猟技術の継承・保存が課題となるなど、片野鴨池を取り巻く状況は大きく変貌しつつあった。

### （2）水鳥保護の立場から見た坂網猟への理解

片野鴨池周辺では、江戸時代より伝統的な鴨猟である「坂網猟」が行われてきている。猟銃を使用するのではなく「坂網」という手網に竹の柄を付けたものをカモが飛んでくる上空に投げ上げ、網に絡ませてとる猟法である。猟師らは、「大聖寺捕鴨組合猟区協同組合」（以下「捕鴨組合」）を組織し、狩猟技術を江戸時代より継承してきている。1969 年には、「坂網猟法と用具」が石川県の「県指定民俗資料」に指定されている。

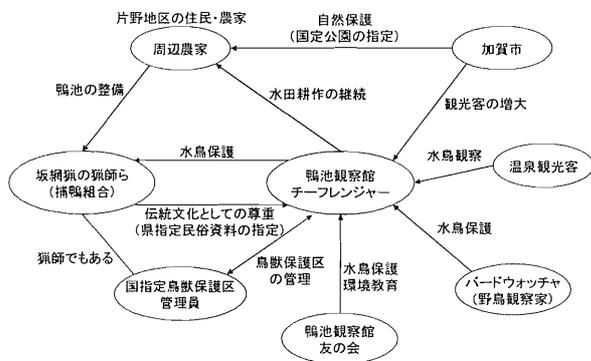
このように文化財としての価値を持つ坂網猟に対し水鳥保護の立場であった山下（1993）、山本・大畑（2004）は、坂網猟はワイズユースの形態の 1 つであると指摘している。中でも山下（1993）は、片野鴨池がラムサール条約に登録される以前の時点で坂網猟はワイズユースの 1 つの姿であることを指摘している。

### (3) 片野鴨池での協調への移行プロセス

図-5は、片野鴨池に関わるアクターからみた要求事項を図化（要求事項マップ）し、関係性を整理したものである。

猟師らが組織する捕鴨組合とチーフレンジャーをつなぐアクターとして国指定鳥獣保護区の管理員が存在する。その管理員は、捕鴨組合に所属する猟師でもあり、坂網猟と水鳥保護の両方と関係を持つアクターであった。

図-5 片野鴨池での要求事項マップ



片野鴨池では、鴨池観察館への新しいチーフレンジャー（唱道アクター）の赴任が契機となり協調への移行プロセスが始まっている。価値観の面で対立的立場にあった水鳥保護の立場である主体と猟師の人たち（後に協働アクターとなる。）との良好な出会いが最初のきっかけとなり協調が実現されるに至っている。

以下は、協調の状態を導き出した唱道アクター（鴨池観察館の前チーフレンジャー）へのインタビュー結果<sup>(註3)</sup> および先行研究をもとに、協調への移行プロセスに沿って整理したものである。

#### ①新たなアクターであるチーフレンジャーの登場

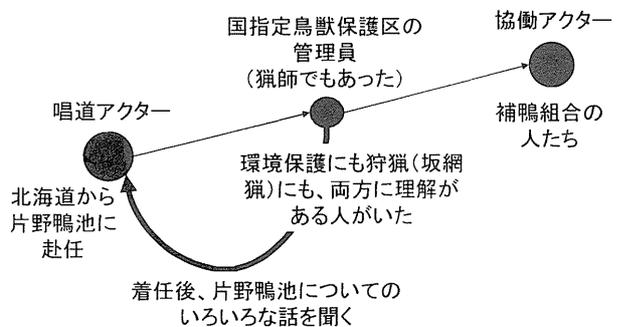
片野鴨池での協調への移行プロセスは、鴨池観察館の管理運営を受託していた日本野鳥の会の人事異動による同館への新たなチーフレンジャー（唱道アクター）の赴任から始まっている。

1995年9月、鴨池観察館に北海道より新たなチーフレンジャーが着任する。赴任後、前任者および関係者よりレクチャーを受けるが時間が限られていたため、十分な情報を得にくい状況にあったという。このため、片野鴨池に関連する情報を自身で収集・検討したという。その結果、着任した1995年当時は、シベリアより渡来するカモの数が相当減っていたことが一番の問題であることを理解したという。

#### ②国指定鳥獣保護区の管理員（猟師）との出会い

捕鴨組合のメンバーの中に国指定鳥獣保護区の管理員でもあった人がおり、唱道アクターは、赴任後にその猟師から片野鴨池についていろいろな話を聞いたという。（図-6）その後、この人とのつながりは、ふゆみずたんぼ農法（冬季に田んぼに水をはり水鳥の餌場とする農法）、地域ブランドとしての米の生産・販売など、協調生成後の新たな取り組みへとつながっている。

図-6 唱道アクターと協働アクターとの関わり



#### ③協働アクターとなった人たちとの良好な顔合わせ

唱道アクターが、捕鴨組合の人たちと初めて会ったのは、狩猟期間の始めに毎年行われているカモの供養祭（鴨塚供養祭）であったという。赴任後の11月に例年行われているカモの供養祭に顔を出し、捕鴨組合の人たちに着任の挨拶をしたという。きちんと挨拶をしたことにより組合の人々に好印象を持ってもらったのであろうという。

唱道アクターは、自身の前任地であった北海道での経験を通じて、次のような認識を持つようになった

ていたという。(i) 猟師も生き物についての知識が豊かであり、猟師も自然保護には必要な主体であること、(ii) 日本での自然保護には、第1次産業（農林漁業）が元気であることが必要であること、(iii) 町内会など地域社会との良好な関係が必要であること、である。片野鴨池での取り組みを振り返ると、北海道での経験が基盤となっていたという。

北海道での経験が基盤となり、唱道アクターは、坂網猟の猟師の存在を肯定するとともに、坂網猟が持続可能な水鳥保護の1形態であると考え、ワイズユースの考えを自らも支持し、猟師たちに提示している。それに対し、協働アクターとなった猟師らは、自らの活動を是とする肯定的考え方を提示されたことにより、唱道アクターとの対話に価値を見出したといえる。高田（2001）は、環境問題の原因の1形態としてアイデンティティの毀損を指摘しているが、この猟師たちの価値観の変容は、高田が指摘するアイデンティティの毀損が満たされたケースとみることができるといえる。

#### ④お隣としての良好な関係づくりの必要性への認識

鴨池観察館の管理者（チーフレンジャー）としては、同館に隣接して捕鴨組合の事務所があり、お隣さんとして良好な関係を築いていきたいと考えたという。当時の猟師たちの第一印象は、前任地であった北海道のウトナイ湖でつきあいのあった漁業関係者と類似した印象であったという。

猟師とのつきあいが深まる中で、猟師たちから聞いたことがレンジャーとしても非常に勉強になる知見が多かったという。ラムサール条約が提唱するワイズユースの1つの事例であるという考えをレンジャー自身で持つとともに、その考えを関係する人たちに広げていくことが、お互いの理解の醸成に貢献したのであろうという。

#### ⑤対話の深まりを通じた相互の信頼関係の醸成

唱道アクターによれば、それまでの経験の中には、理屈をつなげ議論していくことにより理解を得るこ

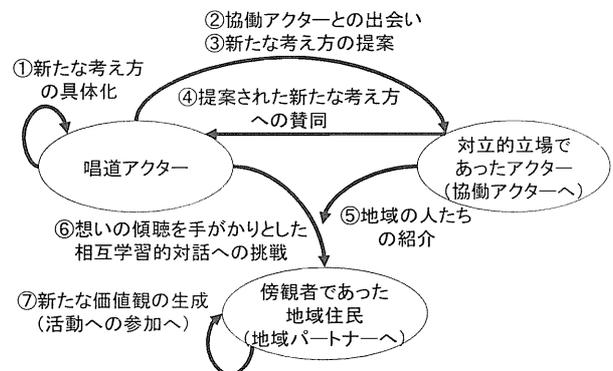
とができる人やグループもいれば、一方で、人と人との信頼関係を持てるか否かを重視する人やグループもいたという。片野鴨池での猟師との関係では、お互いの信頼関係が重要であったという。片野鴨池の場合、信頼関係が築かれたことが協調実現にあたっての最も大きな要因であったといえよう。

以上までが、片野鴨池における対立から協調への移行プロセスである。

### 7 2事例にみる協調への移行プロセス

2事例でのプロセスから、対立から協調に至るまでの流れを整理すると、表1のように整理される。協調への移行プロセスは、7つのステップから構成されていた。また、これらの対立から協調へと転じるまでの移行プロセスをアクター間でのやり取りとして図化すると、図7のように整理できる。

図7 協調への移行プロセス



### 8 まとめ

ケースとした2事例での協調への移行プロセスをみると、それまでは二項対立的な価値観を有していた対立的アクター（協働アクター、地域パートナー）が、唱道アクターとの対話を通じて、唱道アクターが提起する二項対立を超越する包括的な新たな考え方を受容し、そして新たな価値観を獲得し共有していったことが観察できる。またそこからは、協調移行への基盤として唱道アクターが具体化した包括的な新たな考え方の有効性が観察できる。

本研究では、対立から協調への移行プロセスを明

らかにすることを通じて、協調実現に向けた課題として、二項対立的な価値観を超越し互いに賛同しあえる包括的な新たな考え方をいかに具体化するか、

そしてより多くの人たちにその考え方を広めていくかという、という課題を発見したところである。

表-1 2事例での対立から協調へのプロセス

	7つのステップの特徴	蕪栗沼	片野鴨池
ステップ1	唱道アクターによる対立する立場の人も受容可能な包括的な「新たな考え方」の具体化	伊豆沼での長年の取り組みから知見を蓄積	北海道での経験から知見を蓄積
ステップ2	唱道アクターによる多くの人への情報発信と、それを通じた新たな「人との出会い」の誘発	地域の農業者との出会い	捕鴨組合の活動への参加
ステップ3	協働アクターとなる「人との出会い」と包括的な新たな考え方の「提案」	鳥がいることが、農業に恩恵をもたらせないか—と提起	坂網猟はワイズユースの1形態ではないだろうか—と提起
ステップ4	協働アクターとなる人からの新たな考え方への「賛同の獲得」	特徴豊かな地域の宝としての可能性の発見	坂網猟に対する肯定的意見の受容
ステップ5	多様な地域の人たちとの「出会い」	協働アクターを介した地域の人たちとの出会い	よきお隣さんとしての交流
ステップ6	地域の人たちが有する想いの傾聴を手がかりとした「相互学習的対話」の実践	地域の多くの農業者との傾聴と対話を通じた学習	猟師との傾聴と対話を通じた学習
ステップ7	地域の人たちによる「新たな価値観の生成」	地域の農業者による新たな価値への認識	猟師らが自ら持っていた精神への肯定的評価の獲得

## ※ 参考文献

出川真也「渡り鳥との共生から見出した近自然農法の未来 田尻町・蕪栗沼と周辺の水田湿地 蕪栗ぬまっこくらぶ」(自然再生を推進する市民団体連絡会編『森、里、川、海をつなぐ自然再生』2005年)中央法規出版, 115-128頁。

香川裕之「なんにもないから なんでも出来る 蕪栗沼方式」(特定非営利法人まちづくり政策フォーラム『まちづくり政策フォーラムニュース5月号』2000年)。

菊池玲奈・鷺谷いづみ「「害鳥」は地域を結ぶ「宝」になれるか 宮城県・蕪栗沼周辺の田んぼをめぐる取り組みを通じて」(鷺谷いづみ・鬼頭秀一編『自然再生のための生物多様性モニタリング』2007年)東京大学出版会, 125-141頁。

小杉山晃一「日本野鳥の会石川支部報」日本野鳥の会石川支部, 1990年。

牧野隆信「片野鴨池と坂網」(能登印刷出版部編『写真集 鴨池の鳥たち』1986年)能登印刷, 76-78頁。

宮西悠司「「地域力」を高めることが「まちづくり」一住民の力と市街地整備」都市計画, 143, 1986年, 25-33頁。

中村玲子「動物と自然の〔共存〕最前線 片野の鴨池」週刊宝石, 45-9, 1989年。

敷田麻実 (a)「よそ者と協働する地域づくりの可能性 片野鴨池におけるオープンソース型生態系管理プロセス」研究画報, 11, 2005年, 3-31頁。

敷田麻実 (b)「サーキットモデルによる創成教育の学習モデル」工学教育, 53-1, 2005年, 35-40頁。

敷田麻実・森重昌之ほか『片野鴨池の環境資源による地域経済刺激効果の評価に関する研究』2001年。

Satoshi Suenaga, *The Role of Knowledge Interpreters in Japanese Fisheries: Three Case Studies of Local Fishery Policy in Japan*, Proceeding of The Twelfth Biennial Conference of the International Institute of Fisheries Economics and Trade (IIFET2004JAPAN), 2004.

菅豊 (a)「あらしう人びと、つながる人びと コモンズの歴史から見たアクターの異質性が生み出す困難さと可能性」(第33回環境社会学会セミナー資料), 2006年。

菅豊 (b)「里川の異質性社会 あらしう人びと、つながる人びと」(鳥越浩之・陣内秀信ほか編『里川の可能性』2006年)新曜社, 36-65頁。

高田昭彦「環境NPOとNPO段階の市民運動 日本における環境運動の現在」(長谷川公一編『講座 環境社会学 第4巻 環境運動と政策のダイナミズム』2001年)有斐閣, 154-178頁。

梅本勝博「知識創造自治体 地域のナレッジマネジメントによる地域共治モデル」(杉山公造・永田晃也・下嶋篤編『ナレッジサイエンス 知を再編する64のキーワード』2002年)紀伊國屋書店, 62-65頁。

山本浩伸・大畑孝二「ラムサール条約登録湿地7 片野鴨池」私たちの自然, 45-1・2, 2004年, 20-23頁。

山下弘文『ラムサール条約と日本の湿地 湿地の保護と共生への提言』信山社出版, 1993年, 56-59頁。

安室知「農、漁、猟—生活者にとって本業とは何か? 水田漁撈とカモ猟からみる生業と自然の関係」ミツカン文化センター, 2003年, [http://www.mizu.gr.jp/people/pp1\\_01a.html](http://www.mizu.gr.jp/people/pp1_01a.html)。

## ※ 注

- 1) 2007年8月、11月、12月にアクターへのインタビューを実施した。
- 2) 河北新報、2000年12月19日による。
- 3) インタビューを実施した唱道アクターは、いずれも学術誌への寄稿、シンポジウムでの講演など、専門的知見を有するアクターであった。既存の先行研究は、活動内容に着目した研究が中心であり、唱道アクターがどのような活動を行ってきたかという行為については断片的にのみ把握できる状況であった。そこで本研究では、唱道アクターへのインタビューを実施し、唱道アクターによるそれまでの行為を把握した。そして、唱道アクター等による各種の行為のつながりを対立から協調への移行プロセスとして整理している。